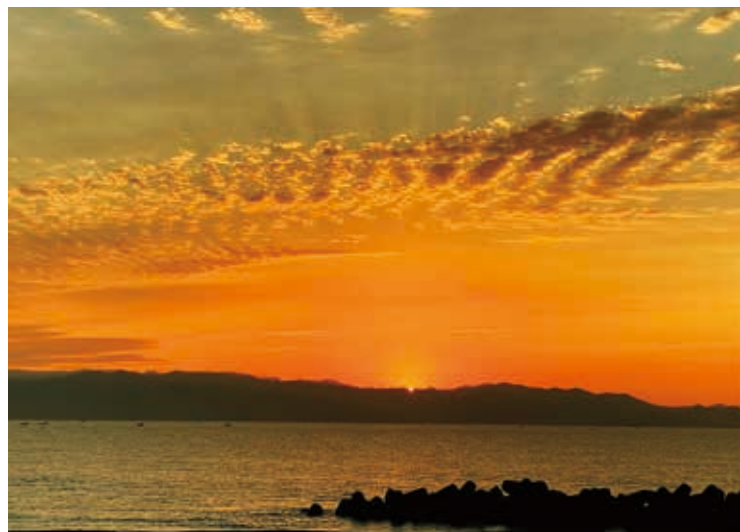


NPO
法人

日本高山植物保護協会 JAFPA

2022.1.1 No.95

- 高山植物を後世に継承するために
- 南アルプスの希少植物の現状
- 大学生高山植物保護活動研修事業
- 朝熊山観察山行
- 伊吹山の鹿害状況、岐阜県側登山道周辺
- 南アルプス高山植物保護活動への協力
- 北岳診療所夏山活動期間の高山植物保護活動
- 高山に咲く花
- 高山植物一口メモ



迎春の輝き
(写真提供：磯野澄也 三保の松原にて)

高山植物を後世へ継承するために ～ニホンジカ増殖の被害対策が緊急課題～

理事：磯野澄也

かけがえのない高山植物を現世から後世へ継承するために、全国的なニホンジカ増殖による植生被害は憂慮すべきで、対策が大きな課題となっています。

山梨県においても近年、亜高山帯・高山帯までニホンジカの進出が確認され、毎年被害が拡大しています。特に南アルプス北岳の草すべり付近においては、新型コロナウイルス対策・台風災害による通行止め等で、昨年度の入山禁止と今年度の入山者減少に伴い、ニホンジカによる踏み荒らし・食害等による裸地化・植生変化が顕著に現われています。かつての高山植物の宝庫は、マルバダケブキとハンゴンソウの群落へと無残に変容しています。反面、一時絶滅に瀕した櫛形山の裸山・アヤマ平は、近年の防鹿柵整備により、キバナノアツモリソウ・ホテイアツモリソウ等植生が戻りつつあります。三ツ峠は一早い防鹿柵設置とテンニンソウ除去により、アツモリソウが保護され良い結果が出ています。自然はただ見守るだけでなく、継承するためにある程度の人為的補助の重要性を感じます。

2008年制定の「山梨県希少野生動植物種の保護に

関する条例」により、絶滅の危機に瀕する特定種25種の高山植物が定められ、その調査業務を山梨県山岳連盟が担っています。山岳レンジャーとして、例年4月から9月までの6ヶ月間、亜高山帯・高山帯の調査から殆どの山域でニホンジカによる被害状況が毎年報告されています。

山梨県のニホンジカ保護管理計画によると、H23年度末の推定生息数約65000頭をR5年度までに半減、その後適正生息数4700頭まで減少させる管理目標を立て、当面の年間捕獲目標を16000頭としています。これらの実践により、標高1000m未満の農林業ゾーンでは減少している反面、標高1000m以上の捕獲が難しい共生ゾーン・生態系保全ゾーンでは増加が懸念されています。山梨県では今後の捕獲の考え方を、標高1000m以上へ強化する方針を打ち出しており、その結果が期待されます。しかしながら、同時に緊急策としての防鹿柵整備を全国的レベルにて、行政府による重点を置いた政策が望まれます。



南アルプスの希少植物の現状について

理事 猪俣健之介

私はこれまで30年近く、山小屋の管理という仕事に就いておりました。キタダケソウ生育地保護区に最も近い山梨県北岳山荘に勤めておりましたが、今年よりその任が解け、今は南アルプス市職員として市役所に勤務させていただいております。この場をお借りしまして、これまでお世話になり、励まし、支えてくださった数えきれないほどの多くの方々に深くお礼をさせていただきます。本当に長き間、ありがとうございました。

私は51歳となりましたが、まだまだ登山はできるので、ガイド資格を持つ身としても、また環境省から委嘱を受けている希少野生動植物保護推進員、自然公園指導員としても、また地元の遭難対策協議会等の立場としても、山に関わりつつ、山の保護と利用の推進に微力ながら寄与することができたらと考えております。今後ともよろしくお願い致します。

今回は、希少植物をはじめとする植物の現状について紹介させていただきます。舞台は、南アルプス北岳と、その前衛の鳳凰三山、楡形山になります。古くから信仰や狩猟、林業、恩賜県有財産管理など、趣味としての登山以外にも利用されてきた山岳地域であり、この共存から生み出された文化が世界に認められ、平成26年(2014)にユネスコエコパークに登録されました。その山域において、広範囲の植生状況が近年変わってきています。理由は、気象状況の変化と、鹿が植物を食べることが主な原因と考えられます。

気象状況の変化とは何か説明します。私は北岳で約30年間、年間120日程、6時、9時と15時に気象観測を行ってきました。その観測で感じたことは、昔よりも風が暖かくなってきていること、5月と6月、10月と11月の降雪、積雪が少なくなっていること、日差しが強くなってきていること、甲府盆地上空の雲海出現が少なくなっているばかりではなく、雲海そのものの高さが低くなっていることが代表的な気象の変化になります。おそらく、晴天率も過去より高くなっているかもしれません。雲がたちこめる、いわゆる霧が昔よりも少ない感覚を山域全体で感じています。

令和3年7月3日本部主催のウェブ講演内容を講演者に寄稿いただきました。当日の講演内容の録画を見たい会員は本部事務局にお問い合わせください。



雲海の高さは低くなっている。また、出現率も低くなってきている。



昔は見られない光景のハイマツの茶色化
雪が少ないことが原因と見られる

おそらくこれらのことが起因となり、山全体が昔よりも乾燥しているような感覚があります。山の乾燥化と鹿の増殖には、関係があるのかもしれないとも考えており、今後研究をしてみたいテーマのひとつとなっています。気温が低く、雪が多く、霧や雨の日も多かった昔は、鹿にとっては亜高山帯や高山帯は心地よい環境ではなかったのではないかと考えています。

植生の変化には、地形、地質、日当たりの変化なども影響しますが、人為的な盗掘や土地開発の他、鹿などの動物により特定の植物が食べられてしまうことも原因となります。見た目で人気のあるラン科植物等には盗掘がありますが、地味で目立たないイネ科の植物などは盗掘からは守られます。また、地味で盗掘はされずとも、鹿に食べられて激減しているクサタチバナもあります。乾燥化により山が崩れ、その生育地を年々失っていくハクロバイなど、自然に衰退する植物もあります。



亜高山帯より下部での山の乾燥化には、先に述べた雲海の出現率の低下や、その高さが低くなっていることも起因しているのではないかと考えています。この結果山が雲に覆われることが少なくなり、併せて降雪量や雨量が少なくなっていることから、山の乾燥化が進んでいるのではないかと、また晴天率の向上が、鹿の行動を活発化しているのではないかと考えています。



楡形山の小低木や落葉さえない原生林

現在、特に楡形山では、森林の下草や小低木、落葉を鹿が食べ、既に次世代が育たない環境となっています。そればかりか、森林土壌の衰退が進んでおり、現在の原生林が消える危機が迫っています。山に木が無くなれば、やがて裸山となり、古来由縁の生態系変化はもちろん、地域の文化や風土さえ変わる一大事となります。希少植物保護どころではありません。そんな現実が、既に亜高山帯以下では山域全体で始まっているのです。



あまりにも状況が違う楡形山防鹿柵の内外

私は地元で、県や国による絶滅危惧種の調査を続けています。その方法や目的を説明させていただきつつ、なかなか見られない植物をいくつか紹介します。それらは決して派手ではなく目も引かない、時にボールペンの先程の小さな花卉をつける植物もあ

りますが、大変希少で貴重な植物たちです。(中略)

キタダケソウはヒゲハリスゲと共存し、石灰岩のある土壌かつ強風帯で生きてきました。タカネナナカマドは積雪量が少なく風の強い箇所に生育しますが、ウラジロナナカマドはその逆を好みます。また、タカネシダやハクロバイは、今にも崩れそうな不安定な場所を好みます。植物を保護するということは、その生育地植生そのものや、気象状況、他の生物、土壌、水、つまりは山を守ることだと思います。そのために行われているのが鹿の捕獲ですが、これは一時的には必要なことかもしれませんが、それが解決には至らないと思います。何故鹿が増えてしまったのか、何故鹿が原生林の下草まで食べつくすのか、そういうひとつひとつの事象の理由に本当の解決があるものと考えています。少雪化や、山の温暖化、乾燥化による生態系変化がもしあるならば、その理由のひとつには現場上空の雲の変化による影響があるように思えてなりません。

以下は、講演後の質疑応答内容です。

■乾燥化とは具体的にはどのような感覚ですか

…表現が難しいのですが、山を歩くときに、地面が乾いている感覚でしょうか。昔はもう少し湿気が感じられ、空気にも水気を感じました。

■保護したい植物生育地があるのですが、行政がなかなか動きません。行政機関に勤めている立場から何かアドバイスを

…行政は、税金を予算化し、事業を実施していく機関であるため、その担当職員には実施における説明責任が生じます。このため、行政を動かすには、地域の議員や、住民の方々に説明できる根拠と目的を明確に示し、理解を得る必要があります。このためには、情熱も必要ですが、根拠となる科学的な裏付けや、有識者の意見、統計や歴史的な記録等が必要になります。そのために、保護検討会を立ち上げる行政組織も近年は珍しくありません。私は当協会において、植物保護に必要なモニタリングを会員の皆様と続け、その結果、各支部どうしの交流が生まれ、情報交換と協力体制が充実し、後世に残すべき自然を保護するためのデータを共有し提供できる協会となることを心から願っており、それはきっと故白（ハタ）先生や故塩沢久仙さんの本協会設立の大きな目的ではなかったのかなと、今は想像しています。



花博記念協会助成金交付事業 大学生高山植物保護活動研修事業

事務局：山本義人

花博助成金事業に応募して採用された事業内容について報告します。(以下事業計画の抜粋です。)

日本の高山植物の現状は、地球の温暖化、それに伴うシカのより高山域への侵入による食害、および特に山野草業者や愛好家による盗掘など、危機的な状況にある。日本高山植物保護協会ではこれまで、南アルプス北岳におけるキタダケソウの保全活動や、山梨県三つ峠山とその周辺におけるアツモリソウの保全活動などを実践してきており、これらの植物の保護・回復に多くの成果をあげてきた。しかし、これらの活動は多くの方にまだ知られていないのが現状である。高山植物が今置かれている状況と、その保護活動の実態を日本高山植物保護協会の会員ばかりでなく、広く一般にも、特に次世代を担う若者にその実態を共有する研修の機会を提供することが必要である。

実施の方法としては、三つ峠山の希少植物種アツモリソウの保護とその自生地での保全作業を、会員と一緒に実際に体験してもらうことである。一泊二日で開催し、一日目は登山道ロープの更新作業を行い、夕食後は、高山植物や保護活動についての知見を深めるための座学と交流の時間をもち、二日目は自生地の植生回復作業を行ってもらうことにする。

参加者は直接体験することで、自然環境の保護活動が身近なものとなり、地球温暖化問題や持続可能社会についての見識が高まるとともに、その体験内容をホームページなどで紹介し、間接体験してもらうことで普及活動につながられる。



植生について見聞学習



登山道ロープの更新作業



植生多様性の回復作業

三つ峠植生保護活動に参加して

静岡県立農林環境専門職大学短期大学部

生産科学科林業コース2年 高野璃音

この保護活動に参加するまでは、高山植物に保護が必要だということを知らなかった。林業を学ぶ中では、どうしても草本でなく木本に目がいってしまう為、あまりに野草や野花に興味を持つことがあまりなかった。しかし、今回の保護活動を通して高山植物の保護の意味だけでなく、自分がこれから将来山で仕事をする中で考えなければならないことを考えることができたと思う。

今回は、アツモリソウを中心に数種類の植物を見学させていただいた。実際に見て、感じたことは気高く美しい。それに尽きる。アツモリソウ以外の花も大小関係なく鉢植えの花とはまた違った野花の力強さを感じることができた。

保護の為にいった、遊歩道の柵の整備やテンニンソウの除草作業では、人間が山の植物について与える影響について考えさせられた。私利私欲でその場所の生態系に悪影響を与えていること、それにより崩れたバランスで減っていく植物と増える植物があることを私たちは知らなければいけないと強く思った。また、高山植物保護協会の方のこれまでの保護活動の話の中では様々な苦労や創意工夫を聞くことができ多くの苦労を感じ取ることが出来た。まさに”嵐を超えずして咲いた花などない”という作家の言葉を体現しているようだと感じた。三つ峠の高山植物にとって生育環境はまだまだ嵐の中なのかもしれないが、それでいても咲いている花々の逞しさや美しさは心を打たれた。

この保護活動に参加させて頂き本当に良い話を聞いたり、体験をしたりすることができたと思う。何事にも興味を持ち自分の知りたい分野だけでなく、その周りにも目を置くことでより良い意見や違った見方をすることができるようになると思えた。学生のうちだけでなく社会に出て仕事をする時にも山全体、そしてその中の多くの植物のバランスを考えた仕事ができるような人になりたいと強く感じるこの体験だった。

今回は花博助成金事業として大学生研修事業を計画したが、JAFPA 会員が属する活動現場に類似事業を展開し、継続していきたい。



朝熊山観察山行

事務局：山本義人

昨年から続いている新型コロナ感染が8月に第5波を迎えたことで、会行事として秋に予定していた観察山行は中止しましたが、10月には感染者数が減少してきたことで非常事態も解除されたので、本部長と事務局及び会員O氏の3人で観察山行を行い、会員の皆さんには間接体験してもらえるよう情報誌に掲載することにしました。O氏は3年前にお一人で朝熊岳道を登ってアサマリンドウを観察されていたので案内役を頼みました。

御殿場から東名で三ヶ日ICを出て新城市の比丘尼城址でエンシュウハグマを観てから豊橋市の葦毛湿原に立ち寄りました。



エンシュウハグマ

昨年夏の終わり8月下旬に観察会を行った場所でもあり、秋のこの時期の様子を観察したいことと、花後のホンゴウソウを観察してみたからです。目当ての場所で探してみるとそれらしきものが見つかり、写真に撮って拡大してみると、何と花らしきものも写っていました。目を凝らして探してみると肉眼でも確認でき、思わぬ発見にびっくりでしたが、後で図鑑で確認すると花期は7～10月となっていました。全体で10本以上もあり、いつもこの場所で花を観察する時は2～3本しか見つかりませんが、順次咲いているのだとわかりました。



秋の葦毛湿原



ホンゴウソウ

伊良湖から伊勢湾フェリーで鳥羽に渡り、伊勢市内に宿をとりました。観察する時には参加したいと連絡をもらっていた伊勢市在住の会員Hさんが宿を訪ねてこられ、本部長とは以前三ッ峠でお会いして以来、会員になってくれたとわかりました。

伊良湖から伊勢湾フェリーで鳥羽に渡り、伊勢市内に宿をとりました。観察する時には参加したいと連絡をもらっていた伊勢市在住の会員Hさんが宿を訪ねてこられ、本部長とは以前三ッ峠でお会いして以来、会員になってくれたとわかりました。

Hさんは朝熊山には何度も登ってはいるが、観察目的で登ったことがないということで、翌日と一緒にもらえることになりました。翌朝伊勢神宮（内宮）を参詣してから伊勢志摩スカイラインに入り、途中の一字田展望台で朝食をとってから朝熊ヶ岳金剛證寺駐車場でHさんと合流しました。

境内の木に着生しているセッコクの果実を観てから、参詣道で頂上に向かいます。道沿いにはマツカゼソウがたくさん咲いていて、咲き始めたセンブリもたくさんありました。途中から経塚群への脇道に入るとアサマリンドウのまだ開いてない状態の花が数個見つかりました。いったん八大龍王社のある山頂に上がって山道を朝熊峠へと下る道筋の林内は少しもやっていて陽光が差しして幻想的な空間でした。足元に注意して下っていくと日が当たって開くのを待っているかの様相のアサマリンドウが散在していました。その中に開いているのを見つけ、透き通るような白地に紫色を帯びて凛々しく咲いている姿に感激です。



アサマリンドウ

朝熊峠から岳道と参詣道で駐車場に戻る道沿いにもアサマリンドウが咲いていて、赤い実をつけたツルリンドウ、花後のアサマギク、スズコウジュ、チャボホトトギス、それにまだ花をつけていたテイショウソウやシマジタムラソウなどを観察できました。カンアオイの仲間やアザミの仲間は同定するのが難しく苦労します。林下で咲いていたアザミはワタムキアザミでしょうか。



シマジタムラソウ

Hさんの生まれは鳥羽ということで海鮮料理のおいしい店を紹介してもらって昼食をとり、鳥羽から伊良湖に戻り東名で帰路につきました。Hさんには今回大変お世話になりました。会員と交流できる機会をもてたことに感謝です。各所での観察は短時間でしたが、三河と伊勢を十分堪能でき印象に残る観察会となりました。来年はこのような機会を多く持てることを祈念しております。

(付記) 朝熊山観察山行の予備知識を添付します。



会員便り

伊吹山の鹿害状況 岐阜県側の登山道周辺

渡邊昭彦

伊吹山は、織田信長が安土時代にポルトガル宣教師に命じて開かせた薬草園があったとされる自然豊かな山である。薬草園とは関係ないが、エンゴサク、カタクリ、ゲンノショウコ、センブリ、トリカブト、リンドウ、ヨモギなど多くの薬草が今も残っている。実家から1時間ほどで行けること、地元の薬学部出身であることから、伊吹山はとても思い入れのある山だ。特に、家庭の事情で地元に戻っていた頃は、よく出かけたものだ。伊吹山と言えば、山頂のお花畑が有名だが、実は他の場所にも多くの花を楽しむことができる。春は雪解けの頃、奥伊吹の麓では春を告げるスプリングエフェメラルが次々に咲き始めるが、今日の話はそこではなく、山頂付近から岐阜県側に向かう途中のハイキング道である。ここでは、盛夏から秋にかけてイブキトリカブト、ヒメフウロ、ゲンノショウコ、イブキコゴメグサ、ミツバフウロ、マネキグサ、ヒナノキンチャク、オトギリソウ、チチブリンドウ、イブキレイジンソウ、イブキアザミなど多彩な花が咲いていた。少なくとも、5年ほど前までは。

ところが、その後ハイキング道が崩落し、道も荒れて花がほとんどなくなってしまったと地元の花友達から聞いていたが、今年の盆前に久しぶりに出かけて愕然としてしまった。登山道の直下は崩落し、登山道のすぐ上のざれ場から岩が崩れ落ちて登山道が途中からほぼなくなって登山道の通行は途中から困難かつ危険な状態だった。ハイカーもいないため、鹿の天国になっていた。以前に見かけていた花は、少し離れた場所に咲くヒナノキンチャク以外は、ほぼ全滅。わずかに、ゲンノショウコ、ミツバフウロが数輪のみ。周辺一帯、

鹿の糞尿の強烈な臭いが漂っていた。壊滅的な植生の直接的な原因は、鹿の食害であるが、糞尿による土壤汚染も植物には大打撃だったようだ。僅かにみられたのは、アケボノソウの蕾くらいだった。もしかしたら他の花も咲いているかと僅かな期待を持って9月に再度出かけてみたが、やはり咲いていたのは、アケボノソウくらいだった。

実は、伊吹山は滋賀県と岐阜県の行政が旗振り役となり、伊吹山を守る自然再生協議会が地元の多くのボランティア団体を束ねて活動している。従来、今回注目した場所については、伊吹山ネイチャーネットワークの団体を中心に調査活動は積極的に継続されているが、鹿対策はまだ予算もついていないし岐阜県側の行政も消極的と歯痒い状況が続いていたと聞いている。しかし、ここにきて地元のボランティア団体も一段と大きな声で、この場所での鹿対策の必要性を訴え始めていると聞き及んでいる。11月末の協議会は、来年度の予算を含めての協議会になるらしい。その会議の結果を期待してやまない。

2014年以前に登山道脇で見れた花

上段左からイブキレイジンソウ、ヒナノキンチャク、イブキアザミ 下段左からイブキコゴメグサ、ヒメフウロ、ゲンノショウコ



2021年の登山道の様子

左から鹿天国に成り果てた登山道、鹿に食い尽くされて坊主状態、崩落し登山道が不明瞭に





静岡支部 活動報告

南アルプス高山植物
保護活動への協力

静岡支部長 鶴飼一博

環境省、静岡県、南アルプス高山植物保護ボランティアネットワークが実施する防鹿柵の維持管理やヤシマットの敷設作業に協力しており、近年、コロナや大雨の影響により活動の延期や中止も続いているが、今年は次の活動ができた。

- 三伏峠のネット柵の立上げ（6月）
- 茶臼小屋のネット柵の立上げ（6月）
- 荒川岳のネット柵の立上げ（7月）
- 聖平の防鹿柵の点検（7月）
- 塩見岳ヤシマットの敷設（9月）

秋のネット柵の養生に関しては、全国的にコロナ感染者が増加したこともあり、すべてボランティア活動は中止となった。

■塩見岳山頂直下にヤシマットを敷設

後ろの左のピークが塩見岳東峰



■ヤシマットの敷設作業



昭和大北岳支部 活動報告

北岳診療所夏山活動期間の
高山植物保護活動

昭和大北岳支部長 木内祐二

令和2年は新型コロナ禍で診療部活動の中止に伴い、高山植物保護活動の多くを中断していた。令和3年も、新型コロナ禍により、活動全般が制限されたが、夏季診療部活動は2年ぶりに再開し、北岳周辺の貴重な高山植物保護のために、出来る範囲内で活動を行った。

（活動期間：7月22日～8月16日）

■白根御池小屋、肩の小屋、北岳山荘に、高山植物保護を訴えるポスター（第10回日本高山植物保護協会昭和大支部ポスターコンテストの入賞作品）を貼付（左はJAFPA会員募集ポスター）



■北岳山荘を中心に高山植物の観察と保護パトロール、そして北岳登山道でのゴミ拾い



令和4年1月1日発行

特定非営利活動法人 日本高山植物保護協会

住所：〒401-0304

山梨県南都留郡富士河口湖町河口 1672

（令和3年6月1日に移転しました）

電話：055-251-6180

携帯：070-1387-5274

E-mail アドレス：info@npa-jafpa.or.jp

HP アドレス：https://npa-jafpa.or.jp



高山に咲く花

ホームページ画像投稿コーナーに投稿された中島正登氏の写真を一部掲載します。
オリジナル写真はホームページ <https://npo-jafpa.or.jp> をご覧ください。



ラン科 ホテアツモリソウ



サクラソウ科 ヒナザクラ



サクラソウ科 ソラチコザクラ



ムラサキ科 エゾリソウ



オオバコ科 エゾヒメクワガタ



サクラソウ科 エゾコザクラ



ユキノシタ科 チシマクモマグサ



ユキノシタ科 クモマユキノシタ



キク科 ウスユキトウヒレン

●高山植物一口メモ タカネナデシコ ナデシコ科

本州中部以北の高山帯の岩礫地に見られる高さ 20cm内外の多年生草本で、花は径 4cmあまり、花弁は濃紅色で美しく、花弁の周縁は著しく細く裂けている。花期は 7～8 月、真に可憐で、凜とした美しさを持った花である。タカネナデシコに似て、花茎が全体に白霜を帯びているのをクモイナデシコと称し、北アルプスの白馬岳周辺に産する。タカネナデシコは高山に生育するナデシコという意味で、平地に生えるのをカワラナデシコと称し、万葉集に詠まれている。

秋の野に 咲きたる花を 指折り(およびをり) かき数ふれば 七種(ななくさ)の花
萩の花 尾花葛花(くずはな) 撫子(なでしこ)の花 女郎花 また藤袴(ふじばかま) 朝貌(あさぎ)の花

(*) 萩はヤマハギ、尾花はススキ、撫子はカワラナデシコ、朝貌はキキョウ

この撫子が由来でヤマトナデシコ、そして“なでしこジャパン”もここから出ているようです。ピンク色のナデシコは、楚々とした姿の中に、芯の通った強い信念を持つ日本女性のような気がします。

(文と写真 大内京子)

